

早稲田大学図書館所蔵寺社縁起関係資料調査報告

藤 卷 和 宏

科学研究費補助金・若手研究 (A)「中世南都宗教言説史の構築」(研究代表者:藤巻和宏、2008～2010年度)の2年目に当たる今年度より、早稲田大学図書館に所蔵される寺社縁起関係資料を対象とする調査を開始した。科研費の研究課題は、中世南都の寺社・神仏をめぐる諸言説の展開を見とおすことにより、「宗教言説史」という新たな枠組みの構築を目指すものであるが、その基盤となる作業として、諸所の寺院・文庫・図書館に所蔵される未公刊資料の調査をおこなっている。早稲田大学図書館の調査も、そうした作業の一環と位置付けられるが、将来的には科研費の課題から独立させ、この調査に特化した資金を得ることも考えている。

ともあれ、そのような経緯で着手した本調査であるが、本稿は、その概要と展望について報告するものである。

寺社縁起研究の動向と新出資料

寺社縁起とは、寺院や神社の創建・由来を説く文献・言説のことである。日本思想大系20『寺社縁起』(岩波書店、1975)収載の桜井徳太郎「縁起の種類と展開」によって、この種の資料が本格的に研究の対象となった。そして同年には、奈良国立博物館監修『社寺縁起絵』(角川書店)が、そして翌年には、桜井好朗『神々の変貌—社寺縁起の世界から—』(東京大学出版会)が刊行され、この二年は、まさに寺社縁起研究の劃期となった時期である。そしてこれ以降、宗教史や美術史のみならず、さらには文学・文化史などの領域とも関わりつつ、寺社縁起研究は進展してゆく。寺社や霊地に関わる絵解き・参詣曼荼羅に注目が集まり、岩鼻通明・黒田日出男・徳田和夫・西山克・林雅彦らにより成果が続々と報告された。私が身を置く文学研究の世界では、『国文学解釈と鑑賞』で二度の寺社縁起特集が生まれ(47-3「寺社縁起の世界」1982、63-12「物語る寺社縁起」

1998)、説話文学会や仏教文学会でも寺社縁起に関連したテーマの例会が何度か開催された。また、私自身も1998年に寺社縁起研究会を設立し、2001年に堤邦彦・橋本章彦らの縁起学研究会との合併を経て、現在では関東・東海・関西・ソウルの四支部体制で運営している。堤邦彦・徳田和夫編『寺社縁起の文化学』(森話社、2005)には、本研究会メンバーも多数執筆しており、寺社縁起研究の新たな地平を切り開くものとして反響を得た(この種の学術刊行物としては珍しく重版もされている)。現在、続編に当たる『遊楽と信仰の文化学』の刊行準備が進んでいる。

さて、こうした動向を経て、寺社縁起は諸領域において重要な研究対象として認知されるに至った。その研究方法は多岐にわたり、寺社縁起それ自体を正面に据え、その成立や系統、あるいは構造について考察するという方向性のみならず、寺院史・神社史・宗教史研究のための資料として扱われたり、各種文学・芸能作品の題材・典故として検討が加えられたりもしている。また、早稲田大学高等研究所フォーラム「シンポジウム 縁起の東西—聖人・奇跡・巡礼—」の開催と、これに基づく『アジア遊学』115号での同名特集(勉誠出版、2008)によって、「縁起」という概念を、地域・宗教を超えた比較文化論的な研究のキーワードとして用いることも試みられている。

このように、様々な面から寺社縁起へのアプローチがなされているが、その中であって、新資料の発掘・紹介・解題も、極めて重要な研究テーマであると言えよう。現在、各地の寺社や文庫、図書館等に所蔵される未公刊の寺社縁起、およびその周縁資料が次々と紹介されている。特に、江戸時代に多数作成された「略縁起」と呼ばれる縁起類は、矢代和夫・宮本瑞夫・志村有弘編『略縁起集』(宮本記念財団、1990)、中野猛編『略縁起集成』1～6巻(勉誠社・

勉誠出版、1995～2001)、略縁起研究会編『略縁起資料と研究』1～3巻(勉誠社・勉誠出版、1996～2001)、築瀬一雄『社寺縁起の研究』(勉誠社、1998)等、資料集の刊行が相次ぎ、近世文学・近世史・寺院史・宗教史・民俗学…等の研究の進展に大きく貢献している。また、これほど大きな動きには至っていないものの、中世の縁起類も単発の資料紹介として諸方面で採り上げられており、枚挙にいとまがない。その中で、早稲田大学図書館に所蔵されるものとしては、『摂州金龍寺縁起』(湯谷祐三「早稲田大学図書館教林文庫蔵『摂州金龍寺縁起』について—中世の説話集における千観—」、『名古屋大学国語国文学』87、2000)や、寺社縁起ではないがそれと密接に関わる資料である『忠快律師物語』(川鶴進一「忠快譚の展開をめぐって—『忠快律師物語』を中心に—」、『説話文学研究』34、1999)などが挙がる。

調査の概要と展望

さて、湯谷・川鶴により紹介された資料は、いずれも教林文庫の所蔵であるが、早稲田大学図書館にはこれ以外にも寺社縁起関係資料が多数所蔵されている。その中でも、とりわけ千厩文庫は注目すべき存在である。当文庫は、日本金石文研究史に偉大な足跡を残した加藤諱・本学名誉教授が、自ら蒐集した文献資料類を本学図書館に寄贈したコレクションであり、金石学・国語学・書道史を中心に、宗教・文学・美術・地誌…等々、広範な領域にわたる資料類の点数は約4500点にのぼる。その中には寺社縁起も多数含まれており、『千厩文庫目録』(早稲田大学図書館、1995)から、標題によって抜き出しただけでも100点を超える。さらに、標題からは判断できないものを実見・検証することにより、また、僧伝・靈驗記・靈場記・境内図といった周縁資料も含めると、点数はその10倍近くになると推測される。本調査では、この千厩文庫を起点とし、本学図書館に所蔵される寺社縁起関係資料の調査を進め、書誌データを記録・整理する。そして、『千厩文庫目録』に挙がらない情報を充実させた「早稲田大学図書館所蔵寺社縁起関係資料目録(仮)」を作成し研究者の利用の便を図ると同時に、特に重要な資料については解題・翻刻の形で紹介してゆく予定である。

千厩文庫所蔵の寺社縁起関係資料の中には、例え

ば『和州寺社記』(写本)、『本朝因縁諸国古寺談』(版本)等の未公開の縁起集や、『興福寺草創之由来』『東大寺記』(ともに写本)といった他機関に所蔵の確認されないものもある。これらの資料を調査・検討・紹介することにより、科研費のテーマである南都の寺社をめぐる言説展開史に新たな視点を導入することが可能となろう。また、南都諸寺社の縁起を集成した、所謂「南都系縁起集」(藤巻和宏「長谷寺縁起の展開・一斑—護国寺本『諸寺縁起集』所収縁起をめぐって—」、『むろまち』6、2002)のついに護国寺本『諸寺縁起集』があるが、当文庫には本書の明治期の新写本も所蔵されている。原本以外には、東京大学史料編纂所の影写本と、それを写した京都大学所蔵本の二種の新写本しかないとされていた本書であるが、当文庫所蔵写本の存在により、明治時代の教部省における本書の(ひいては種々の宗教関連諸資料の)書写事業の実態などをうかがうことも可能となる。

さらに、当文庫には南都のみならず、ほぼ国内全域に及ぶ寺社縁起関係資料が所蔵されている。今年度は科研費調査の一環であるため、これらは検討対象にはしなかったが、別の資金を得ることにより、科研費から独立させて全体を調査したいと考えている。また、千厩文庫以外の特殊コレクション、あるいは一般古典籍の中にも寺社縁起関係資料は多数含まれている。中でも、曲亭馬琴(1767～1848)旧蔵の曲亭叢書に含まれる『縁起部類』という寺社縁起を集成した書物は非常に注目すべき資料である。しかし、近世文学研究の世界で曲亭馬琴は重要な研究対象として認知されている(国文学研究資料館「国文学論文目録データベース」での検索結果は「曲亭馬琴」855件、「滝沢馬琴」152件)ものの、この『縁起部類』が注目されることはきわめて稀である(同データベースでの検索結果「縁起部類」2件)。これは馬琴研究の文脈のみならず、近世文学研究全体にわたる問題であり、中世文学研究の世界で寺社関係・宗教関係の資料・題材が重視されているのとは対照的に、これらへの注目度はきわめて低い。しかし、テキストの種類や現存資料の点数は、近世の寺社・宗教資料のほうが遥かに多いのである。このジャンルは、後小路薫・堤邦彦・西田耕三・和田恭幸ら、少数の近世文学研究者による研究の蓄積はあるものの、それでも膨大な量の資料が未検討・未公開のまま残されているのが現状である。今

後は、近世文学研究者もこうした分野に注目してゆく必要があると思われるが、まずはそのための基礎作業として、中世・近世文学研究者が連携し、資料の調査と紹介をしてゆくことが求められる。さらには、史学・美術史・宗教学・民俗学等、他分野の研究者にも開かれることが望まれるのである。

今年度の調査

今年度は3回9日間（5月21～23日、8月5～7日、11月18、20、21日）の調査をおこない、162点の典籍を調査することができた。参加メンバーは以下のとおりである（五十音順）。

有賀夏紀（学習院大学非常勤講師）
 伊藤慎吾（国士舘大学非常勤講師）
 植田 麦（実践女子大学助教）
 宇野瑞木（東京大学大学院生）
 太田有希子（早稲田大学大学院生）
 黒田 智（早稲田大学高等研究所助教）
 佐藤 優（総合研究大学院大学大学院生）
 清水紀枝（早稲田大学大学院生）
 大東敬明（國學院大學 PD 研究員）
 高橋悠介（神奈川県立金沢文庫学芸員）
 徳永健太郎（早稲田大学高等学院非常勤講師）
 土橋由佳子（フェリス女学院大学大学院生）
 西尾知己（早稲田大学助手）
 貫井裕恵（早稲田大学大学院生）
 吉村晶子（学習院大学大学院生）

メンバーは日本文学研究者が多いが、それ以外に日本史（黒田・徳永・西尾・貫井）・美術史（清水）・宗教学（大東）・民俗学（佐藤）を専門とする者もいる。うち、古典籍調査の経験を有する者は約半数であり、他のメンバーは、対象への興味もさることながら、調査経験を積むという目的で参加している。

調査経験の浅いメンバーに対しては事前にレクチャーをおこない、また、調査の場で指導、あるいは協議しながら調査を進めている。書誌調査の方法は個人やグループによって異なることがあり、また、典籍の形態（冊子本・卷子本・一枚物…等）による相違も少なくない。そういった問題点をクリアすべく、可能な限り記録方法を標準化するための調査カードを作成して使用している。このカードには、題目（所蔵者整理書名・調査者認定書名・外題・内題・扉題・序題・目録題・尾題・跋題）・装丁（巻

子・折本・旋風葉・粘葉装・列帖装・袋綴・仮綴・一枚物・疊物・洋装…等）・寸法（表紙・題簽・匡郭・界線・字高…等）・料紙（楮紙・斐紙・楮斐交漉・三桎・間似合紙・近代紙…等）・表紙の色と文様・紙数・一面行数・用字（本文・付訓・書入）・絵（描画法・位置）・書入（位置・内容）・保存状態・蔵書印・奥付…等の基本的な書誌事項のほか、典籍の内容・構成に立ち入った事項（例えば章段名・他資料との関係・挿絵の内容…等）も詳細に記録している。

現行の目録やデータベースは、最低限の事項を挙げてはいるが、これだけでは把握しきれない情報がありすぎる。もちろん、原本を実見することが最良であるとは言うまでもないが、膨大な蔵書の中から目的に合致した典籍を見いだすことは容易ではない。目指すべきは、研究者にとって有用な情報を概観し検索できる形式の目録であり、これを作成するには、検索を支援する基礎的な書誌情報に加え、調査者の知見によって関連付けられるべきその他のターゲット・キーワードとして情報を抽出することが必要となるのである。前記「早稲田大学図書館所蔵寺社縁起関係資料目録（仮）」の完成は、こうした情報を充実させ、それをいかに適確に掲載することができるかに懸かっているとさえいえる。